
ある^{カミンチュ}神人の事例

片 本 恵 利

(要旨)

わが国における近代化の過程の中で、多くの人々、特に女性が、共同体のために自分を滅して奉仕するしがらみから逃れることになりに成功したと同時に支えも失い、不安や孤独感を抱いている。本稿では、1999年から2000年までの沖縄本島北部の一人の神人（カミンチュ）Cさんと筆者の関わりの経過を報告し、現代の共同体と個人との関わりについて考察を試みた。1999年、Cさんとともに村の海神祭に参加した筆者は、Cさん達神人が地にひれ伏して祈る姿に心を打たれた。2000年、筆者はCさんの村に住むことになり、Cさんは、方々に頭を下げ筆者のことを取り計らってくれた。筆者が行事などに参加し地域に分け入るために琉球古典音楽を唄えること（歌・三線^{さんしん}）が思わぬ効果をあげており、Cさんも喜び励ましてくれた。村のアサギの完成祝いでも筆者は三線を弾くように誘われたが、三線の試験に向けた合宿のため参加できなかった。その祝いの席でCさんは倒れて亡くなった。2002年、筆者はCさんの村に関する夢を見た。畏にはまり暴徒と化した少年達の生け贄になるところを、カウンセラーとして振舞うことで生き残れるかもしれない可能性が示唆されて目覚めた。地縁・血縁によって自動的に組み込まれる共同体のしがらみからの解放と同時に守りも失った現代人は、Cさんのような生き方や、Cさんのような存在に甘えながら共同体を成り立たせるやり方をもはや選ばず、自らの帰属先を選び、共同体側も成員を選ぶプロセスが展開している今日、神人として生ききったCさんの死により、師と、自らを滅して我々を甘えさせてくれる母とを同時に失った筆者にとって、共同体と個人のかかわりを自分の目で見、自分の声で語る道の模索が今後も課題となろう。いみじくもこの課題は、三線の訓練で、本当の自分の声で歌うことが目指されているのと重なってくる。多くの現代人にも通じる課題である。

キーワード：共同体 神人 母親殺し 犠牲

1. はじめに

明治以来（特に戦後）、多くの日本人が大家族や共同体のしがらみから逃れ自由になることを追求してきた。それはむべなることかな、と思われる。例えば、横溝正史の小説のような世界は今でもあるかもしれないが、劇的に減ったはずである。しかし、その結果、街の歴史や風土は一旦まっさらに均され、日本中に、パズルのピースのように入れ替えても分からないほどの、どれも同じような街が出現してしまった。そこで生活する個人もまた、その土地、家ならではの歴史一時に財産となり時に重荷となる一を背負わない、それ故他人と入れ替えられる可能性の不安が付きまとう「透明な存在」となってしまった面も否めない。神戸の児童連続殺傷事件の犯人とされる少年が使ったこの言葉が凶らずも同世代の少年少女に反響を巻き起こしたことは周知のとおりである。空気抵抗がなければもっと楽に飛べるのにと思っていた鳥も、空気がなくなれば空を飛べない、という例え話のごとくである。人々は一方で共同体の抑圧から逃れようと願い、他方で、居場所のなさや取り残されたような孤独感にさいなまれている。

拙論「沖縄における民間信仰の現在」で、欧米の文化では父親殺しと自我の確立が大きなテーマであるのに対し、我が国の文化は「母を殺しなおその母に甘えようとする」心性に大きな特徴があるといえるのではないかと述べた（片本，2001）。「女を殺して母とし、なおその母に甘えようとする」という見方もできるかもしれない。西洋でも「母親殺し」は大きなテーマであるが、むしろ魔女や怪物のような悪しき女性イメージを駆逐して父性原理を確立することが主目的であるのに対し、我が国では、穢れのない女性を、一女性としての生き方をやめると言う意味で一旦殺して「良き母親」として生まれ変わらせ、その「母親イメージ」に甘えることで平和を保ってきたのではないだろうか。戦前の大家族には、陰で泣いている女性も多数いたであろう。

これに対し現在では、学校教育の中で目に見える成果をあげることを要請されながら成長してきた女性の多くが、母となることで、一旦社会的に抹殺される恐怖・疎外感を感じているのではないだろうか。

多くの女性が口にする。「結婚すると姓を奪われ、出産後は〇〇ちゃん／君のお母さんと呼ばれる。誰も自分の名前を呼んでくれなくなる。夫さえも自分をお母さんと呼ぶようになる。」その女性も、夫のことを「お父さん」と呼んでいるかもしれないが、その「お父さん」には、家庭の外では、名前を呼んでくれる人がいる。乳幼児を抱える母親の多くは、職場や友人関係などから切り離され、24時間、どこにでもあるような街のどこにでもあるような住居の中で、ただひとり、自分の意のままにならない存在と向かい合わねばならない。

ある母親が、買い物の間、駐車場に幼児を放置する母親についてこう言った。「自分はそう

いうことをしたわけではないが、そうしたくなる気持ちはよく分かる。スーパーの客全員が自分の子どもを可愛いと思ってくれるわけではない。中には子どもが嫌いな人もいる。子どもも、いつも機嫌よくおとなしくしてくれるわけではない。急いでいる時に限って子どもがむずかったりごそごそし始める。その時の周囲の刺すような視線を考えると、本当にちょっとした間だけ、と子どもを置いていきたくなる。」このような例は、個人として社会から抹殺され、目に見える成果のでにくい子育て機能を一人で担わされてしまった母親の姿を示していると考えられないだろうか。

2. 沖縄の伝統文化の現在と女性たち

沖縄でも、女性は家に仕える存在であった時代が長く続いた。近年変わってきてはいるが、「長男嫁は家の奴隷」とは今でもよく言われることである。高齢者の世話を全面的に任されたり、古い家筋で、壁一面がトートーメーや香炉で埋め尽くされているようなところでは、一日・一五日に線香をあげるだけでも相当な負担である。その合間に、家族・親族の絆を確認し合う場でもある盆や正月、清明祭や法事その他の行事があり長男嫁は当然のように使われ拘束されるため、自由が利かない。自分の思うように趣味を楽しんだり旅行に行ったりすることもままならない人が多数いる。

地域の伝統文化は、共同体運営の一環として培われてきた。伝統的な共同体がなし崩しになっている現在では、伝統文化の継承は大きな岐路に立たされている。エイサーが新興住宅地であらたに始められたり、県外出身者が伝統工芸の継承生になるなど、芸能や工芸は復活や見直しの機運も見られるが、神事などは、高齢化、過疎化が進む中で、年々縮小・簡略化の方向をたどるか観光化していくのが一般のようである。戦後の生活改善運動の流れで、神事が前近代的な因習として攻撃されたり、中心的な役割を担う神人（カミンチュ）の負担の大きさに耐えかねてクリスチャンに改宗する人もいたりしたと聞く。神人は、原則としてその集落の古い家筋の女性が受け継ぎ、季節ごとの行事で村の世果報を請い願い祈りを捧げるのであるから、まさに「村の長男嫁」的役割を期待され、担ってきたと言える。（神人が必ずしも実際の嫁であるという意味ではない。）

今日、神女役を受け継ぐ人はほとんどおらず、もはや風前の灯のようなありさまであるが、ぎりぎりのところで、神事の意義を伝えていこうと努力している人達もいる。筆者は、このようなぎりぎりの一線で切実な選択をし、行動している人の生きざまを知ることが、これからの日本人と共同体のあり方を考える上で重要な示唆を与えてくれると考え、神人をはじめ、地域・共同体と個人との関わりについて考える人たちに会ってきた。本稿では、このうち、本島北部の根神^{ネガミ}Cさんについて報告する。なお、筆者はこれまで参与しながらの観察という手

法を用いており、その時々状況をより詳しく記述できるよう、当時の筆者自身の状況、立場や、Cさんとのやり取りを通じてわいてきた感情についても述べることにする。

3. Cさんの事例

筆者は1998年2月、本島北部の根神Cさん（大正10年生まれ）と出会った。民話やCさんが小さい頃の地域の様子、神事のことなど、珍しい話を面白おかしく、ときにはうっとりするほど美しい描写で聞かせてくれるCさんの優しい面差しと語り口に惹かれ、年に何度か通うようになった。筆者は、取材や研究と言った立場から枠組みを決めて質問することはほとんどできなかった。その時の筆者には、まだこちらから話を引き出せるほどの準備は整っておらず、ただCさんが語るそのままを聴くのが相応しいように思われたし、こちらの了見でCさんのお話の豊かな味わいを切り取ってしまうのは自分にとって全く面白くないことのように感じられたのである。この時から現在にいたるまで、自分の知りたいこと、分からないことを自分の内にもって調査地に向かい、調査・研究を通じて考察を得る態度に徹していない筆者のスタンスは一般には研究者らしからぬものであったと言える。Cさんの世界の豊かさ、奥深さに惹かれるばかりで主体的に関わることはほとんどできず、少しでも長くそばにいて何かをつかみたいという漠然とした動機をもつのが、Cさんに対する当時の筆者の精一杯であった。筆者の状況についてはCさんも分かっていたと思う。数多くの興味深い話を語ったあとでも、おもしろなどは「これはあんたには分からない」と、意味の解説などほとんどしなかったし、何か大切なことを言われたように感じてメモを取ろうとすると、「メモはあとにきなさい」とたしなめられ、まあ一服、と菓子を勧められたこともあった。

①Cさんと筆者との関わりの経過：1999夏～2002 初夏

i) 1999.夏

集落の一大行事である海神祭に参加するように誘われた。この祭りは、集落後方にある山を歩き、決まった場所で祈りや歌を捧げる神事である。以前は海からの来訪神を海岸線まで送っていたため夜通しかかったそうだが、現在は、潮の加減に合わせて昼過ぎに始め、夕方には帰ってくる。しかし、住民も神人も高齢者が多くなり、旧盆直後の暑い時期に足元の悪い山を歩き回るのは相当な負担だと思われる。

当日は、別の集落でより規模の大きい神事が先に始まるため、そちらをだいたい見てから来なさい、とCさんに言われた。筆者はオレンジ色のチェックの長袖ブラウス、大きいサングラスに帽子、手袋、という、場の雰囲気よりも日よけを重視したとしか言いようのない服装でCさん宅に向かった。

Cさんの自宅には、Cさんと、地区の女性のその年の世話役（会計他、計2名）がいた。その2名はCさんを神事の場所に車で連れて行くつもりであったと思われるが、Cさんは2名を先に行かせ、筆者に運転手を頼んできた。実はCさんは体調が悪く、病院で治療中であるが、神人が減って今日の大事な行事を仕切る者がいないため、無理をして、今日は点滴を打って出ることにした、ついでに、筆者に運転手と介添えをしてほしい、と言うのである。筆者は、Cさんの体調を心配しつつも、特等席で取材ができることが嬉しいという気持ちにもなったが、何より、Cさんの心遣いがありがたかったし、お世話してあげたいと感じた。Cさんの立場では地域の人には借りをなるべく作りたくなかったため、外部の人間でほとんどしがらみのない筆者にはかえって頼みやすかったのかもしれない。しかし、それもCさんが筆者に気を遣わせないための口実だったのかもしれない。

かくて、筆者のレンタカーに、大切な神事のための道具と何より大切な神人を乗せ、祈りの場所に向かった。その日一日、筆者はCさんのそばについて手を貸したり荷物をもったり履物をそろえたりする役であった。周囲の人もCさんの体調には気を遣っている様で、途中の険しい坂道では、親戚の男性（この方自身も高齢）が、名乗りをあげてCさんを背負っていった。

いつもは明るく何でも笑い話に変えてしまうCさんが、この神事も昔はたくさんの神人が参加し、色とりどりの衣装と歌声でそれは美しかったのに、今年は自分を含め二人だけになってしまって、自身も体調が悪くて以前のような声が出ず、歌も満足に歌いきれない、いったいどうなってしまうのだろうと、か細い声で、まるでうわごとのように繰り返していたのが痛々しかった。情けなさ、寂しさ、不安などが無い交ぜになっているようだった。

帰宅後は、^{なおり}直会ということで、自宅の敷地内の^{トウチ}殿内前で、お供えの菓子のお流れなどをいただきながら、昔話、Cさんの所へよく訪れる研究者のこと、その研究者のお祝いのパーティーでスピーチをしたエピソードなどを聞いた。参加者は筆者を含め、外から取材に来た研究者ばかり3名ほどであった。その時は（Cさんのほうがよほど疲れているに違いないのだが）、むしろCさんのほうが元気に感じられるくらいで、筆者は不覚にも、慣れない神事の取材で日頃使わないエネルギーを使ったためか居眠りしそうになる始末であった。8時半頃直会はお開きになった。

翌朝Cさんの自宅を訪問すると、区長、昨日山道でCさんを背負った男性が来ていた。区長は、Cさんの体調を心配して様子を見に来たのであった。Cさんを背負った男性は、少し酔っている様子で「神を背負って重かった。神の重さは大変だった」と繰り返していた。Cさんは我々には茶と菓子をすすめ、男性には「飲ませなさい」と酒を飲ませていた。自分自身が一番大変に違いないのに、いつもこうして人をもてなし、飲みたい人には酒を飲ませ、決して

責めたりしなかった。圧倒的な優しさだった。

その日には別の集落でまた神事があるということで、Cさん宅を訪れた研究者たちに筆者を紹介し、同行できるよう取り計らってくれた。

ii) 2000.4月

筆者は、Cさんのそばで運転手や荷物もちをしながら昔話や神事の話聞いて暮らしたいという思いが募り、本島北部に移住した。これまでも沖縄本島に住んだことはあるが、ヤンバルに定住するつもりで来たのは初めてのことであった。

Cさんは、たいそう喜んでくれ、また、筆者が気持ちよく暮らせるようにと、さまざまな人たちに陰で頭を下げていたようだ。

望んでやってきたにもかかわらず一日一日を有効に使えない筆者であったが、Cさんは、行事の際には必ず「三線でかりつけてちょうだい」と口実を作って誘ってくれた。また、三線をととても喜び、ほめていた。

(4.13.) 新しいアサギ(祖先・神を迎えるための建物)の吹き上げの^{ウガン}御願に誘われ、参加。参加者は区長、地区の世話役、神人、神の世話役、筆者であった。

筆者が住むことになった一軒家のそばを、Cさんは、診療所に行った帰りなど、毎日のように様子を見に来て、近くのMさん(1999年夏にCさん宅にいた世話役の一人)宅で一緒にお茶を頂いたりした。Cさんは、自分はこの家を一日でも我慢できないと言い、筆者がこの家に住むのは無理ではないかと心配していた。筆者の引越しには地区の方も親切に手を貸して下さったのだが、筆者自身の見通しが甘かったことやコミュニケーションの取り方が不十分だったこともあり、結局、最初に紹介された家は筆者には住みこなせないと判断し、隣の区の教員住宅に移ることになった。結果的に、Cさんはじめ地区の方の厚意を踏みつけにする形になってしまい、筆者も悩んだが、Cさんはかえってほっとした様子で、筆者を気の毒がっていた。筆者が一連のことでお詫びと話し合いにうかがう先の一つに、Cさんに同行をお願いした(4.19.)。その家の方も腹を立てているわけではなかったようだが、Cさんが出てきて頭を下げられては、丸く治めるしかなかったであろう。

iii) 5月

(5.12.) 友人が見えていると夜から電話で誘われた。もう一人の神人で筆者をCさんに紹介して下さったSさん、Cさんの妹、近隣の人たちが数名いた。あとから、男性1名(Cさんを山で背負った方)も加わった。Cさんの自宅は、しばしばこうしてにわかサロンになるのである。庭先のシンメナービ(鍋)で、スンシー(筍)を煮ていた。Cさんは筆者に

県外からのある研究者と「お友達させよう」と言って、研究者の自宅に電話をかけて下さった。あいにく本人は不在で、奥様に紹介された。この時、テレビで寝たきりのお年寄りに関する番組が放映されており、Cさん、もう一人の神人Sさんが揃って、「こんなになって生きていたくない」と言うので、筆者や他の人が慌てて、「Cさんには長生きしてもらわないと！」と言うと、Cさんは「皆で長生きしよう」と言った。

(5.13.) 地域の春の行事に筆者を伴って顔を出し、じきじきに、地域の方に、筆者のことをよろしく、と頭を下げてくれた。筆者は、せめても、ということで、Cさんの地域、そして筆者の住む地域それぞれの輪に入って三線を弾き、Cさんはそのことを喜んでいた。

(5.中旬) Cさんから5. 21. に拌みがあるので来ないかと誘いがあった。この年、6月に受ける三線の試験のための試演会がこの日に予定されていたので、〈三線の試演会があるが、何時に終わるか分からない。時間が合えば行きたいです。〉と言うと、「いっぺんに二つのことをすると中途半端になる。一つのことを集中して頑張りなさい。」と諭され、「またいつかいらっしゃい」と言って電話を切られた。「またいつか」などと控えめな言い方をしなくてもいいのに、と筆者は思った。

(5.27.) Cさんの地区で新しいアサギ完成のお祝いがあるので三線を弾いてほしいと、Cさんから朝8時頃電話で誘われた。しかしまたしてもこの日は三線の受験者のための強化合宿なのであった。前回、一つのことを頑張りなさいと諭されたこともあり、筆者が合宿がある旨を告げ、非常に残念そうにしていると、「ではがんばってらっしゃい。またいつかいらっしゃいね。」と言って、電話を切られた。筆者は、この前から誘われていたのに行けないままなのが気にかかっており、合宿から帰ったらすぐにでも顔を見せるのだから「またいつか」などという言い方はしなくてもいいのに、と少し寂しく思った。

(5.28.) 楽しく充実した合宿から帰宅すると、留守番電話に、Mさんから連絡ほしい旨メッセージが入っていた。折り返し電話をすると、Cさんが亡くなったという。もともと体調がよいわけではなく時限爆弾を抱えているようなCさんであったが、前年の行事のときも「神が力を与えてくれる」といって、頑張ったではないか。つい先日も、「皆で長生きしよう」と言っていたではないか。なぜ、よりによって、三線を弾きなさいと誘ってくれた大事なお祝いの日に限って、Cさんも喜び、行事参加の糸口にもなる三線の合宿があり、Cさんが亡くなってしまうのか。

どうしようもない虚脱感で身体を引きずるようにしながらCさんの自宅に向かうと、何人かの方が、筆者を探していた。最近いつも行事のときは一緒だったのに見えないからどうしたのか、と聞いていたとこのこと。実は何日も前からCさんは筆者をこの行事に誘うと言って、何かの外出のついでには、その日の運転手に頼んで筆者の自宅の前を通らせていたらし

い。しかしいつも、筆者は三線の練習のため帰宅が深夜になっていたのだった。その様子を知っていた人たちは、口々に、Cさんとはとにかく筆者のことを気に入って、三線を弾かせるのだと何度も言っていた、せつかくここに住むことになって喜んでいたのに残念だ、もう少し生きていてくれたら、あなたもいろんなことを教えてもらえたのに、と言う。

Cさんは行事の日、いつになく体調がよく上機嫌で、一人でどンドン山道を歩き、食事も「おいしい」とよく食べたそうだ。一通りの神事をなし終えて公民館に戻り、祝宴で挨拶を述べた直後、衆人環視の只中で吐血して倒れ、その夜のうちに永眠されたと言うことであった。

iv) その後

(2000. 夏 海神祭) 一番奥の拝所で、テープからCさんの歌が流れ、筆者は胸が締め付けられる思いであった。Cさんは神歌を録音していた。自分がいつどうなるかわからないという危機感があったのだろう。一方で、満足に声が出し切れないのもう少し調子のよいときに録音しなおしたいとも言っていた。それは果たせぬままとなったのだった。筆者にとって前年にこの山をCさんと歩いたことを単なる思い出として振り返るのはまだ辛い、Cさんは今この山にいるのだという感覚が湧いてくる。筆者は、すでに亡くなった自分の近親者の魂がどこにあるのか全く分からないし、墓参りをしてもそこで故人とつながれるという感覚はもてない。また現在、沖縄のどれだけの人たちがこうした感覚をもっているか定かでないが、この時、筆者は祖先の魂が集落後方の森にあって子孫を守ってくれるという「クサティムキ」の感覚に少し触れられたような気がした。

(2002.3.) その後も筆者は三線を続けている。Cさんとの最期の別れを阻んだ三線が、その後もやはり、学校行事、地区のお祝い、地域の活動などに筆者が入っていくきっかけとなっている。筆者はこの時期にこの地域から転出したのだが、近隣の方が小さなお別れ会を開き、その席でもやはり請われて三線を弾いた。すると、お別れ会発案者の男性の曰く、近く予定されている地区の行事は週末にあり那覇から帰ってくる人もいる。呼ぶので参加して三線を弾いてほしいとのことであった。この区に住むことになって初めてCさんに連れられて参加した行事である。酔うと一度も住んだことのない関西弁を操りブルースハーブを吹く男性も、ぜひ来てください、と関西弁で繰り返す。しみじみとありがたく嬉しい言葉であった。筆者は自分の都合でこの地域に来、何ほどのことをしたわけでもなく、留守がちでいかほど馴染めたわけでもないが、こうして三線を一つの口実として、筆者は何とか地域とのつながりを保つことができている。

(2002.6. 筆者の夢の一部) 《村の中に、どういう理由か知らないが筆者を殺そうとする

人たちがおり、誰もがその人たちの側について、筆者を陥れようとする。筆者は畏から逃げられず、暴徒と化した少年の集団に取り囲まれる。筆者はたいした理由もなく少年たちの怒りの的となってこの村の生贄にされるのだと思い、心底恐怖と無力感をおぼえ、小声で「怖いよ！」と繰り返すだけで足がすくんでしまう。せめて理由を知りたいと、なぜ自分がこのような目に遭うのか尋ねると、一人の少年が、「(筆者の) 前のカウンセラーに腹が立って」と答える。筆者は腹に力を込めて、「それで？」と聞く。会話が続けられるかもしれない感じがあり、やったこともない格闘その他の手段ではなく、カウンセラーとしての自分のやり方で何かできるかもしれない、と思ったところで目が覚める。》

4. 考 察

1999年夏の神事の中で最も印象的だったのは、一番奥の拝所で、神遊びをする場面であった。神人が^{ゆがふ}世界報を請い願い、訪れた海の神・山の神と一緒に遊ぶと言う趣旨である。世界報を請い願い、地面にひれ伏して祈りを捧げるCさんたちの姿に、筆者ははっとさせられた。決して派手な化粧や衣装があるわけでもなく、動きも素朴で、背筋も足取りも年齢相応に変化しているが、見ている筆者に直接迫ってくる美しさと圧倒的なインパクトが胸を打った。自分は心理臨床に関わっているが、本当に、何者かに対して、掛け値なしにこうして頭を垂れたことがあっただろうか。少しは人に頭を下げることも覚えてきたが、本当にここまで頭を下げることができるだろうか。一人一人の力ではどうしようもないことが世の中にはいくらかあることは頭では分かっているが、どこかで、自分が何とかしようとして無理をしていた部分はなかったか。その姿勢からくるひずみは筆者自身のみならず、来談者にもはね返ってきはしなかっただろうか。Cさんたちは、自分自身のためではなく、村の人たちのためにここまで頭を下げている。そこにCさん達の神々しさがあるのではないだろうか。そしてそれこそが神人の本質の一側面であるがゆえに、近代教育を受け、「近代的自我」モデルがしみついた(近代的自我を確立したと言う意味ではない)人は、あとを継ごうとしないのではないだろうか。

多くの人たちが、共同体のために個を滅する生き方を否定し、個人としての自己実現を目指してきた。しかし、西洋の本来の個人主義のように、絶対的な神との対置という大前提なしに個人を考えているため、単に共同体からの逃避となり、根無し草のような不確かさ、頼りなさに悩む人が多い。

一方、Cさんは、幼少の頃より神事に接する中で自然に神歌を覚え、昭和19年に神人を継いでからは、文字通り共同体のために自分を捧げた一生を送った。近年は後継者も少なく神事に携わる人が減っていく中で、地域の神事のみならず、本来の自分の受け持ちでない地域の

屋敷の新築祝いやスクールバスの交通安全祈願まで引き受け、合間に民話の語り部として研究者や児童生徒に民話を語り伝え、自宅に集まる人たちをもてなす日々であった。それらを意味あること、自らの使命として引き受け、神人としての人生を全うしたのである。若い時期に生死の境をさまよひ、その時は輸血によって一命を取り留めたものの、同時に感染症にかかって、時限爆弾を抱えたような状態を何十年も生き続けたCさんは、輸血がなかったら自分はどうに死んでいた、あとの命は、神のための使命を全うするため神によって生かされている命だ、と語っていた。ある覚悟をもって神人を引き受け、神人として生きることを選択したのだろう。それを頭では知っていても、Cさんの、まさに生贄となったような壮絶な最期を知らされると、やりきれない思いに駆られ、こうまでして神人として生ききったCさんに、私たち皆が甘えてしまっていたこと、本当にCさんを殺してしまったことへの罪悪感が生じる。自分が困ったときにCさんを頼り一緒に頭を下げてもらった筆者、祝いごとや厄除けの祈願をお願いした人達、Cさん宅に夜となく昼となく集まって楽しいひと時を過ごした人たちは言うまでもなく、Cさんが何をしているか全く知らない村の若者も、さらには、沖縄を「癒しの島」と思いノスタルジーをはせているヤマトウンチュ（筆者もやはりその一人に入るだろう）も、意識するとせざるに関わらず、直接・間接的にCさんに甘える気持ちがなかったとは言い切れないだろう。翻って、筆者が身の振り様を考える時、共同体のため、家族のため自分を滅ぶような生き方を選ぼうとは決して思えない。この、「犠牲になりたくない」気持ちと、自分の存在が、どこかで地域の人々の気分を害し反感を買ってはいないだろうかという不安が、前述の夢を導いた一因だったと考えられる。このうち、「犠牲」の部分については筆者はまだ明確な方向性を見出せていない。しかし、地域の人々の反応については、すでに一つの地域と関わってしまった以上、何らかの波紋は生じているものとして受け止め、逃げるのではなく自分のやり方で、自分の使命を全うするしかないのではないか。

三線の稽古の中で、入門当初から現在にいたるまで最大の課題は、「師匠のうたを自分の中に染み込ませ、それを本当の自分の声にのせて歌うこと」である。つい最近になって、研究所の先輩たちから、「この頃、洋楽風な感じがなくなって本当のウチナーの歌を聴いている感じがするようになってきた」と言われることがある。三線は研究所に通い師匠の下で稽古でできる有難さがあるが、Cさんの死によって師と母を同時に失った研究者としての筆者には、現在の沖縄で生きる人の姿を、借り物でない自分の目で見、本当の自分の声で伝えていくことこそが課題であると考えている。

現代を生きる多くの人にとっても、自分の意志によらず地縁・血縁によって一つの共同体に組み込まれ己を曲げて伝統的な方法を踏襲していく方向への圧力はなくなったかわりに、自分を後ろから支えひとつずつ手ほどきしてくれる存在もまた失った。それぞれが、自分の帰

属する場所を選び選ばれ、自分の方法で自己実現を図っていく道を取ろうとしている。

5. 参考文献

- 石塚尊俊 1994 『女人司祭』慶友社
- 片本恵利 2001 「沖縄における民間信仰の現在」山中康裕 他『魂と心の知の探求—心理臨床学と精神医学の間—』創元社
- 河合隼雄 1998 『日本人の心のゆくえ』岩波
- 河合隼雄 他 1983 『日本神話の思想 スサノヲ論』ミネルヴァ書房
- 宮台真司 1997 『透明な存在の不透明な悪意』春秋社
- 仲松弥秀 1990 『神と村』梶社
- 仲松弥秀 1993 『うるまの島の古層 琉球弧の村と民俗』梶社
- 老松克博 1999 『スサノオ神話でよむ日本人 臨床神話学のこころみ』講談社
- 岡本太郎 1996 『沖縄文化論 忘れられた日本』中公文庫

A case study of an Okinawan priestess

KATAMOTO, Eri

In Japan, people-Women, housewives in particular- had made big effort to release themselves from the way of life which sacrifices themselves for their community. On the one hand, they made some achievement, but on the other hand, they began to feel a kind of anxiety and loneliness they had never experienced before.

This paper reports what had been happened between a priestess of northern part of Okinawa Island (called 'Ms. C.' in this paper) and the author from 1999 to 2002, to make a study of the relationships between individual and community today through her way of life ;

She behaved perfectly as a priestess and sacrificed herself for her mission. In 1999, the author took part in some ritual in the village, deeply moved by the prayer they made deeply bowed down to the ground. In 2000, the author had moved in to Ms. C's village. Ms. C. had asked many people to take care of her secretly. Playing Okinawan classical music (Uta-sanshin; singing classical songs with playing sanshin, Okinawan traditional musical instrument) was a great help for her to take part in ceremonies and go into the local cultures. Ms. C. had so pleased and encouraged to play Sanshin. The Author was invited to play Sanshin at the celebration of completing Asagi(a kind of structure to make ancestors or Gods welcome) in Ms. C's village, but she couldn't because she had to go to training camp for examination of Sanshin that day. Ms. C. fell down at the end of that ceremony and died that night. In 2002, the author had a dream which she was caught in a trap and going to be a scapegoat for boys' riot of Ms. C's village. She awoke indicated that she may survive by behaving not as a priestess, nor a mother of the village, but as a counselor. There are neither pressures nor support, guidelines for modern people in their community into which the member was incorporated automatically by birth or marriage. They won't choose the way of life like Ms. C. or manage their community on the basis of sacrificed people like Ms. C. today. People prefer to select the community to belong to, and communities select the member to accept. The author had lost when Ms. C. died both her guru and mother who sacrifice herself to satisfy her. She has to continue to confront her theme; to watch the relationships between the community and individuals with her own eyes and to narrate with her own voice. That theme is same as emphasized through her training of Sanshin. And many modern people may have same theme as her.

Key words: community, priestess, killing mother of oneself, sacrifices oneself for the community